

日本基督教団
柿ノ木坂教会

牧 師 渡邊 義彦
協力牧師 松下 恭規

教 会 報

186号 2018年3月25日

〒152-0022

東京都目黒区柿の木坂

1-31-19

電話：03-3717-3870

Fax：03-3717-3916

巻頭言

「キリストを知ることのすばらしさ」

——フィリピの信徒への手紙第3章8節——

牧師 渡邊 義彦



そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。

(新共同訳聖書)

パウロは、これまでの彼の人生で、かつては有利であったもの一切を、今現在はまったくの損失と見なすと言います。かつて価値高く、値打ちがあると思われたことは、彼の生まれであり、彼が努力と精進に勝ち取ったものであり、身に付けた資質、能力、社会的地位でした。

パウロは、ユダヤ人の父母のもとに生まれ、その家系はイスラエルのベニヤミン族の血筋にありました。イスラエルの父祖ヤコブの末の子、ベニヤミンの子孫には、後にイスラエル初代の王サウルが生まれます。さらに時代を下り、イスラエルが南北王朝に分裂してゆく中では、南王朝がユダ族を中心に国を建てる一方で、北王朝はベニヤミン族が中心となり国を建ててゆきます。この王族の末裔にパウロは生まれました。

生まれて八日目に割礼を受けることによって、律法の規定通りの人生をパウロはスタートさせます。幼い頃から聖書に親しみ、ラビ・ガマリエルの薫陶を受け、ヘブライ人の中の

ヘブライ人と言うほどに、ヘブライ語を巧みに駆使し、律法、聖書に精通していました。律法、預言者、聖書の一点一角もおろそかにしない生き方、生活を、同年代の仲間の誰よりも優れて生きてくることができた、誰にも決して負けることはなかったと自負できるほどのユダヤ人エリートの道を歩んできました。これらの生まれ、資質、才能、教育や修練で身に付けた能力や教養、そして勝ち取った地位、ステータスはパウロの将来を約束し、パウロの人生に大きな利得をもたらすものであると思われてきたのです。

ところが、パウロにとって絶対と思われた価値観、彼の将来を明るく約束していた利益となるべきことを、まったく異なる価値観に逆転させてしまうことが、彼がダマスコへと急ぐ途上で起こりました。パウロがまったく予期もせず、予想もせず、思い描きもしなかった仕方で、それは起こりました。むしろ、パウロは、まったく反対のほうに顔を向けていて、間違っている方向、しかし、このときのパウロにはまったく正しいと思われていた方向に進むことこそ、必ずや大きな利得を、自らに、そして彼の属してきた共同体にもたらすに違いないと堅く信じて決して疑わずに、この道を進んでいました。キリスト教会を滅ぼすことにこそ、自分が生まれながらに与え

られた生き方を全うする最も大きな利益となると、パウロは堅く信じていました。

道をまったく反対に進もうとする最中で、これまで、パウロには絶対と思われた価値が完全に失われてしまう逆転が起こります。価値あるもの、利益と利得、儲けとなるものは一切の価値を失い、むしろ不利益を被るもの、損失となるもの、無駄なものとなりました。このことは反対からこうも言えます。この逆転は、これまでまったく価値がなく、無駄だと思われてきたことの本当の価値、絶大な価値に気付かされることであった、ということです。

この価値の大逆転をもたらされたのは、ダマスコのキリスト教会を滅ぼすために王の道と呼ばれる街道を急ぎ、町を目前とするところで突進するパウロの道を塞がれた復活の主イエス・キリストです。復活の主キリストは、これまで絶対に価値あると思い込んできたことは、実はまったく無価値で無駄なものであることをパウロに気付かせられるのです。

光に打たれ見えなくなっていたパウロの目が、洗礼によって、その目からうろこのようなものが落ちることで目を開かれて世界を正しく見るようになります。価値あると思い込んできたものが実は無価値なものであり、これまで価値がまったくない、無駄なものと思い込んでしまっていたことがほんとは絶大な価値を持っていることに気付かされます。まるで、手にしていた金が実は土くれのかたまりであったことに気付かされるように、大きな利得によって溜め込んできた貨幣の価値が極端なインフレによって一挙に暴落するように、埋もれていた宝を泥だらけの中から見つけ出したように、無くして価値を失ってしまった銀貨を部屋の片隅から見つけ出したように。キリストは、他の一切を損失、無価値なものとしてしまう、絶大な価値あるもの、どんな時代の荒波にも、天変地異、世界や社会、歴史の変転にも、たとえ、この世界が過ぎ去っても決して価値を失わない、他の一切

を凌ぎ、勝る、絶大な価値ある宝をパウロに教えていただきました。

この絶大な宝は、イエス・キリスト御自身です。復活によって既に永遠の命に生きておられるキリストです。十字架の御苦しみを、わたしたちのために負ってくださった救い主キリストです。神を第一とするということは、神以外のものに神以上の価値を見つけることは決してできないということです。この宝であるお方を知られるとき、他の一切は色を失い低められ、元の位置を取り戻し、本来あった位置づけを与えられ、神以外の一切は過ぎ去るものであることを知らされます。

パウロは、生まれも、身に付けた教養も、能力も、地位も、名誉も、手にした財産、宝も、一切が過ぎ去るものであることを正しく知りました。永遠であり、一切を超えて存続し、決して価値を失わないのは神だけであり、キリストだけであることを知らされました。そして、彼は、キリストを受け入れキリスト者とされました。キリストが生きておられること、十字架に死なれたお方が既に永遠の命によみがえられ、今も生きておられることを受け入れ信じて、キリスト者として歩みはじめるのです。

集会出席統計（月平均人数）

	2018年	
	1月	2月
主日礼拝	88.0	83.3
聖書と祈り会	13.0	16.0
教会学校*	93.8	89.0

*保護者、教師を含む

(第1主日開催)	1月7日	2月4日
聖餐夕礼拝	10	13

「にじのいえ信愛荘維持献金」

成松 三千子

「最近新しく教会員になられた方がたの中には、この「にじのいえ信愛荘」という名称に対して、これって何？と思われるかもしれません。この長い名称は、2010年に「にじのいえ」と「信愛荘」が合併した結果の名称です。隠退教職方とパートナーのためのホームとして、「信愛荘」は1959年に東京教区によって青梅市に設立され、西東京教区と一緒に運営されてきました。一方の「にじのいえ」は、1973年に全国教会婦人会連合（以下婦人会連合）によって、婦人献身者ホームとして千葉県館山市に設立され、両ホームとも、ほぼ順調に管理運営されていました。

しかし、1997年介護保険制度が導入された頃から、入居希望者が減少してきたのです。そもそも、設立の動機が福音宣教のため生涯をささげた隠退教職及びパートナーの老後が惨めであってはならないとの信徒の熱い思いからでしたので、入居費もずっと低く抑えてきました。そのため、もっぱら全国の教会、伝道所からの献金に支えられ懸命に管理運営してきましたが、教会員の高齢化と減少化に伴い、次第に財政的に厳しい局面を迎えました。

2008年でしたか、当時の教団総幹事より今後の趨勢を鑑み、未来を見据え、合併して運営管理していく可能性と方向性が提案されました。もとより宗教法人上、施設は教団所有のため、教団と長く管理運営してきた東京教区、西東京教区、婦人会連合による約2年間の入念な協議を経て、「にじのいえ」は館山市を離れる決断をし、青梅の地に合併して一つとなり、合併の結実としてB棟を建築し、2010年より「にじのいえ信愛荘」として新しい道を歩み出したのです。

こうして「日本基督教団にじのいえ信愛荘」は、教団の<各種センター>の一つとして位置し、教団が委嘱した婦人会連合、東京教区、西東京教区の3運営母体からの構成メンバーによる運営委員会によって、運営管理されて

今日に至っています。ちなみに、私は合併問題浮上の時期から関わっており、引き続きこの運営委員会に参加しています。また、委員会内の小委員会である広報委員会に属し、年に2回発行の「青梅のにじ」編集の仕事をしています。内容は荘の紹介で、現在20名入荘者の日常生活や1年の歩み、運営委員会事項をお知らせし、入荘希望者へのお誘いと、現在ご献金くださる皆様に、荘の実態を知っていただく良きチャンスとしています。もう一つ、年1度のチャリティーコンサートを開催など資金のための募金小委員会があります。この委員会には松田町子さんが関わっておいでです。

最後に「青梅のにじ」第16号から須藤運営委員長の巻頭言を抜粋して紹介しましょう。『現在、荘には老人施設として青梅市、東京都から種々の規定がかかり、消防署からは消防施設の要望が出され、労働基準局からは職員の労働時間や賃金等について、法遵守を迫られる状況にあります。これらは、今までのキリスト教施設などでの、すべてを奉仕の精神でというようなあり方が、もはや難しい時代になったことを示しています。』

設立の趣旨により行政からの補助金はもとより、日本基督教団からも資金援助を受けておらず、入荘費と、3運営母体の東京教区、西東京教区、婦人会連合と「隠退教職を支える運動」からの協力金協力金や募金小委員会主催のチャリティーコンサートと観劇からの収益金以外は、以外は、もっぱら全国の教会、伝道所、学校、諸団体、個人の皆さまからの献金と寄付金などで、辛うじて支えられているという厳しい現状なのです。

幸いなことに、柿ノ木坂教会では皆さまがよく理解くださり、多額の献金がささげられています。本当にありがとうございます。2018年度もどうかよろしく願いいたします。

*** 献金担当には成松三千子姉の他、松田町子姉も携わっていらっしゃいます。**

「詩編 23 編と私」

若林 之矩

ダビデのうた
エホバはわが牧者なり われ乏（とも）しき
ことあらじ
エホバはわれを緑の野にふさせ いこいの水
濱（みぎわ）にともないたもう
エホバはわが靈魂（たましい）をいかし み
名のゆえをもて我を正しき道にみちびき
たもう
たといわれ死の陰の谷を歩むともわざわい
をおそれじ なんじわれとともにいませばな
り なんじの筈（しもと）なんじの杖われ
を慰む
なんじわが仇の前にわがために筵（えん）を
もうけわが首（こうべ）に油を注ぎたもう
わが酒杯（さかずき）は溢るるなり
わが世にあらん限りはかならず恵みと憐れみ
とわれにそいきたらん われはとこしえに
エホバの宮に住まん
（漢字、仮名遣いなど若干手をいれていま
すが、読みは変えていません。）

私は小学校4年生の時にクラスメートのお母さんの奨めで日曜学校に通うようになりました。日曜学校は子供であふれていました。分級でなにをしたか記憶にありませんが、聖句を暗唱させられたことは覚えています。とくに詩編 23 編は今でも文語訳で口に上ります。

小学校上級か中学1年のとき軽井沢での夏期学校に参加しました。軽井沢教会の礼拝堂で寝起きたのだと思います。礼拝でかなり齢を召した牧師先生が説教をされました。先生は閻魔様の持っている棒（こん棒にとげがたくさんついている）を野球のバット大にしたものを持って講壇に上げられました。話が進むうちにそのバットみたいなもので床をド

ンと叩き「君たちはこれが何か知っているか。これは『しもと』という。羊飼いはこれで猛獣と戦い羊を守るのだ」と言って、また床をドンと叩きました。共同訳の「鞭」とは随分イメージが違います。その牧師先生は木村清松（せいまつ）という高名な先生だとずいぶん後になって知りました。

私は映画が好きです。巨匠ジョン・フォード監督の「わが谷は緑なりき」をご覧になった方は多いと思います。イギリスの炭鉱が斜陽産業になり、落盤、爆発で多くの炭坑夫が事故死し、ストが続発していました。信仰厚い父親に育てられた炭鉱夫の兄弟も長男が事故で亡くなり、第二人がついにアメリカの炭鉱に行くこととなります。聖書を読んで欲しいと頼まれた父親は詩編 23 編をゆっくりと読み進みました。その朗読を聴き終わると兄弟は袋を担ぎ家を出ていきます。

「戦場のメリー・クリスマス」もご覧になったでしょう。大島渚監督の作品です。第2次世界大戦の時日本の捕虜になったイギリス兵などが日本軍に酷使されます。英軍将校の一人が日本刀で処刑されようとした兵隊をかばって反抗し、ついに首だけ地面に出した生き埋の処刑をされます。強制労働から帰ってきた仲間が毎日宿舎から心配そうに生き埋めにされた将校を見つめる中、やがて臨終を迎えました。そのとき誰歌うともなく深く、しかしなにか力に満ちた歌声がわき上がります。「主はわが飼主・・・」で始まる歌でした。この歌は後に讃美歌 21 の 120 番として取り上げられ、私もこの曲を愛唱するようになりました。屋根裏部屋で一人いるときよく歌います。ある日の礼拝で清水ひとみさんが前奏の時にこの曲をひかれました。ジャズ風とも感

じる曲で大変感銘を受けましたので、礼拝後「清水さんが編曲したのですか」とたずねたところ、前奏曲集に入っていると伺いました。

詩編 23 編は長い年月、世界中の信仰者をどれほど慰め、力づけたことでしょうか。私もその行進の末尾を歩ませていただいています。

ルターは第 23 編第 6 節について「ダビデはこう言いたいかのようなのである。『主よ、・・・

あなたは、私にあなたのみ言葉を与え、あなたの民であり、あなたを知り、賛美する者たちの中に私を受け入れられました。それゆえに、今後は、私がみ言葉にとどまり、決してあなたの聖なるキリスト教会から離れることができないという恵みをお与えください。』」と語っています。

☆☆☆教会の行事☆☆☆

- ◇3月25日(日)～31日(土) 受難週
- 3月25日(日) 棕櫚の日曜日
- 3月29日(木) 洗足木曜日
- 3月30日(金) 受難日
- ◇4月1日(日) 復活日礼拝(イースター) 午後、愛餐会



画：久保なみよ

EASTER イースター礼拝
2018年4月1日(日) AM 10:30～

説教「なぜ、涙するのか」 柿ノ木坂教会牧師 渡邊 義彦

キリスト教に興味のある方は、どなたでもご参加ください。
日本基督教団 柿ノ木坂教会

- ◇4月15日(日) 礼拝後 2018年度教会総会
- ◇5月13日(日) 教会学校との合同礼拝
- ◇5月20日(日) 聖霊降臨日(ペンテコステ)
- ◇6月 伝道月間

今月のメッセージ

——ホームページ巻頭言 から——

ホームページには多くの情報が掲載されています。

ぜひご覧ください

<http://kakinokizaka-church.com>

わたしたちの助けは、天地を造られた主の御名にある。

(新共同訳聖書・詩編第124編8節)

聖書は、その冒頭から、神様がおられることから書きはじめています。神様がおられるか、おられないかは聖書以前のこととして一切議論せず、聖書は、生きて働かれる主なる神がわたしたちのために何をしてくださったのか、から語りはじめるのです。世界を善いものとしてお創りになった、

主なる神の善き創造の御業から語るのです。

聖書は、主なる神様が世界を善いものとしてお創りになったことから語り始めていますが、しかし、わたしたちの日常には、世界が善いものとして創られたとは思えないことが起こります。人が人を傷つけることが起こります。自然が人を脅かしてくることが起こります。人と人の間にも、人と自然の間にも善いことばかりではなく、悲しむべきこと、怒り、苦しまなくてはならないことが絶えることはありません。そこにわたしたちの疑問が起こります。聖書は本当のことを言っているのか。神は世界を善いものとお造りになったのか。そもそも、神はおられるのか。

冒頭の聖書の言葉を、昨年5月のこの欄にも掲げて、震災6年目の石巻を訪ねたときのことを一文として記しました。自然災害の甚大さ、人為的なミスや限界を改めて目の当たりにしました。7年目を迎えてもなお、災害、事故の終息を見通すことはできません。

教会は、この間、しかし、なお「わたしたちの助けは、天地を造られた主の御名にある」ことを覚え続けてきました。助けは、主なる神から、このことをもってはっきりと、もっと確かに教えられてきました。昨年、この聖句を掲げて書いた一文にも記しましたが、この聖書の言葉は、2011年の震災直後に教団議長が震災への取組みのために掲げたものでした。未曾有の危機の中で、主なる神様への信頼に揺らぐわたしたちを、この御言葉は導き、支えてくれました。それゆえ、わたしたちはここまで歩んでくることができました。この詩を書いた詩人も、神の民の存続の危機の中で、主なる神への信頼を訴え、この詩を記したのでしょう。

世界を善いものとして創造された神が、キリストによって世界を救ってくださった神であることを、キリスト教会は知っています。善き創造の御業を、人が、自然が、壊してしまっている現状、人が人を傷つけ、自然が人を脅かしている現状すべてを克服してくださるためにキリストが来てくださったことを教会は教えられています。

東日本の震災を記念する日が、教会の暦では、必ず、主イエス・キリストがわたしたちのために十字架を負ってくださったことを魂に深く刻む季節に重なることは大切なことであると思うのです。世界を善いものとして創造なさった神は、世界を救われる神であることを同時に覚えることになるからです。

(牧師 渡邊 義彦)

——編集後記——

- ・クリスマスに受洗された姉妹から自己紹介の原稿を頂きました。共に主の教会に仕える者として歩んで参りましょう。
- ・「にじのいえ信愛荘」を支える運営委員会の委員としてのお働きを書いていただきました。献金で支えるとともに、大切なお働きのために祈りたいものです。
- ・「詩編 23 編」に勇気づけられている一人です。若林兄の一文に改めてその思いを新たに致しました。主の復活日を前に。
- ・教会報へのご意見、ご感想をお寄せください。
(編集委員長 井澤浩一)

集会案内

主日礼拝 日曜日 午前10時30分
聖餐夕礼拝 第1日曜日 午後5時
入門講座 日曜日 午前9時30分
教会学校 日曜日 午前9時
(幼稚科、小学科、ジュニアチャーチ)
*ジュニアチャーチは中学生、高校生です。
聖書と祈り会 水曜日午前10時、午後7時30分

日本基督教団 柿ノ木坂教会
〒152-0022 東京都目黒区柿ノ木坂 1-31-19
電話 03-3717-3870 (教会・牧師館)
03-3723-3870 (ベテル幼稚園)
牧師 渡邊 義彦
協力牧師 松下 恭規